２．プロジェクト報告

凡　例

⑴　プロジェクトは、年度計画との対応表の規定（11～20頁参照）にしたがって、①～⑥の分類項目ごとに年度計画の記載順として配列し、担当部門と掲載頁を明記した。

⑵　各プロジェクト報告の掲載頁では、分類項目と担当部門の記号・背番号（二桁）のほかに、業務実績の該当年度及び該当年度が計画年数の何年目の報告にあたるか判別できるよう配慮し、記号を追記した。

例　文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究（①企01-14-4/5）

①→プロジェクトの分類項目

企01→担当部門の記号とプロジェクトの背番号

14→業務実績の該当年度の下二桁、2014年度の実績であることを示す。

4/5→５年計画の第４年目の報告であることを示す。

⑶　背番号のないプロジェクトは、日常業務のなかで実施、または他のプロジェクトの一環として総合的に実施しているもので、適宜、必要な場合に注記を付した。

⑷　年度計画との対応表への逆引き参照の便を図るため、プロジェクト報告の掲載頁の上部に対応表のArea番号を付記した。

①プロジェクト研究に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究（企01）	企画情報部	27
文化財の資料学的研究（企02）	企画情報部	28
近現代美術に関する交流史的研究（企03）	企画情報部	29
美術の表現・技法・材料に関する多角的研究（企04）	企画情報部	31
無形文化財の保存・活用に関する調査研究（無01）	無形文化遺産部	32
無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（無02）	無形文化遺産部	34
無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集（無06）	無形文化遺産部	36
文化財デジタル画像形成に関する調査研究（企05）	企画情報部	37
文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究（保修02）	保存修復科学センター	38
文化財の保存環境の研究（保修03）	保存修復科学センター	39
文化財の材質及び劣化調査法に関する研究（保修01）	保存修復科学センター	40
周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究（保修04）	保存修復科学センター	41
文化財の防災計画に関する研究（保修05）	保存修復科学センター	42
文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究（保修06）	保存修復科学センター	43
文化財修復材料の適用に関する調査研究（保修12）	保存修復科学センター	44
近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（保修07）	保存修復科学センター	46

文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究（①企01-14-4/5）

目　的

本他機関との連携を図り、文化財の研究情報について、効果的に発信していくための手法を研究・開発し、文化財に関する研究情報の蓄積を行うとともに、公開・活用のための手法等について総合的に研究する。また、東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築を推進する。

成　果

1．一昨年度、試行版として創刊号から50号までの一般公開を行った「東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』」について、明治期の残りすべての分のデータ処理を進め90号まで公開した。
2．明治から大正期に刊行された美術雑誌『日本美術画報』初編～五編を公開した。また売立目録のデジタル化作業について、東京美術倶楽部と協議を進めた。
3．「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に各種図書情報を移行し、各部署が所蔵する図書情報の一元化と一体運用のための準備を進めた。また、誌面のデジタル化とデータ処理についても作業を継続して進めている。
4．アーカイブズを主題とする各種研究会を開催し、アーカイブズのあり方について検討した。

報告

・津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規「研究ノート ウェブ版『みづゑ』の研究―美術史料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望―」『美術研究』414号　東京文化財研究所　pp.1-18　15.1
・加治屋健司・上崎千・橘川英規「研究ノート アート・アーカイヴの諸相」（橘川英規「はじめに」、加治屋健司「美術アーカイヴのなかの美術史」、上崎千「アーカイヴと前衛―表現の非永続性ephemeralityと資料体」、橘川英規「中村宏氏作成ノートに残された記録と資料―観光芸術研究所、東京芸術柱展を中心に」、加治屋・上崎・橘川「ディスカッション」）『美術研究』415号　東京文化財研究所　pp.43-66　15.3

発表

・皿井舞「文化財アーカイブズ構築の取り組み」東京文化財研究所総合研究会　東京文化財研究所セミナー室　15.1.13

研究組織

○田中淳、山梨絵美子、二神葉子、小林公治、津田徹英、塩谷純、小林達朗、皿井舞、安永拓世、城野誠治、河合大介、橘川英規、福永八朗（以上、企画情報部）、飯島満*（無形文化遺産部）、佐野千絵*、早川泰弘（以上、保存修復科学センター）、山内和也、加藤雅人（以上、文化遺産国際協力センター）、高砂健介*2、平出秀文*3（研究支援推進部）、津村宏臣、中村佳史、吉崎真弓、丸川雄三（以上、客員研究員）

*企画情報部併任、*2 6月30日まで、*3 7月1日から

『日本美術画報』トップページ

文化財の資料学的研究（①企02-14-4/5）

目　　的

日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤を整備、確立する。併せて、その基盤を礎としながら国内外の研究交流を推進し、成果を広く一般に公開する。

成　　果

1．東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業、および、美術史研究のためのコンテンツづくりとして、平安時代在銘彫刻作品の銘文データの入力と編年目録（年表）の作成を行った。

2．1. の東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業の成果の一端を企画情報部研究会（2014（平成26）年８月６日）で口頭発表を行った。

3．2. の成果（企画情報部研究会での口頭発表）の内容を『美術研究』414号、同415号に掲載した。また、東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作の『記事珠』ウェブサイト上での公開に向けてのパイロット版を作成し、第48回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」（2014（平成26）年10月31日）で講演を行った。

論文

・綿田稔・江村知子・土屋貴裕「研究資料 続稀蹟雑纂―ポートランド美術館所蔵作品簡解（一）―」『美術研究』414号　東京文化財研究所　pp.27-34、15.2

・江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂―ポートランド美術館所蔵作品簡解（二）―」『美術研究』415号　東京文化財研究所　pp.67-72　15.3

・吉田千鶴子「研究資料 黒田清輝宛外国人留学生書簡　影印・翻刻・解題」『美術研究』414号　東京文化財研究所　pp.58-73　15.2

・児島薫「藤島武二による黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について（１）」『美術研究』415号　東京文化財研究所　pp.73-76、15.3

・児島薫「黒田清輝、久米桂一郎宛　藤島武二書簡（１）」『美術研究』415号　東京文化財研究所　pp.73-76　15.3

発表

・吉田千鶴子「黒田清輝宛外国人留学生書簡　影印・翻刻・解題」企画情報部研究会　東京文化財研究所　14.8.6

・児島薫「藤島武二から黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について」企画情報部研究会　東京文化財研究所　14.8.6

・津田徹英「一流相承系図（絵系図）の構想と機能」第48回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」東京文化財研究所　14.10.31

研究組織

○津田徹英、田中淳、山梨絵美子、二神葉子、小林公治、塩谷純、小林達朗、皿井舞、安永拓世、河合大介、橘川英規、福永八朗（以上、企画情報部）、江村知子（文化遺産国際協力センター）、中野照男、三上豊、近松鴻二、吉田千鶴子（以上、客員研究員）

近現代美術に関する交流史的研究（①企03-14-4/5）

目　　的

日本を含む東アジア諸地域における近現代美術の研究資料の収集、整理、調査研究を行うとともに、その交流を明らかにする有効な視点と調査研究方法の開発を目指す。また、多様化する我が国の現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を作成する。

成　　果

１．黒田清輝作品及び関連資料の調査研究

ア）黒田清輝《東久世伯肖像》（参議院蔵）、《春・秋》（個人蔵）の調査を行った。また菱田春草《菊慈童》（飯田市美術博物館蔵）、岸田劉生《古屋君の肖像（草持てる男の肖像）》（東京国立近代美術館蔵）の光学調査を行った。

２．現代美術資料の整理作業及びデータベース化作業

ア）笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進めた。また美学校の中心的人物だった今泉省彦所蔵の資料調査を行った。

イ）当所所蔵近現代美術資料データの公開促進についての調査研究として新海竹太郎の手記や制作に関する写真・書類等、資料一括を受贈、前年度に寄贈を受けたガラス乾板に加え、新海竹太郎アーカイブの拡充を図った。

ウ）矢代幸雄・ベレンソン往復書簡の翻刻・翻訳及び関連調査としてベレンソンの研究所を引き継いだイタリアのヴィラ・イタッティでの調査を行った（一部助成金）。

エ）現代美術資料の整理作業及びデータベース化作業として今泉省彦資料の調査をもとに、企画情報部研究会で橘川・河合による口頭発表を行った。

３．東アジアを中心とする近代美術の交流に関する調査研究として東京工業大学准教授の戦暁梅氏、ソウルで研究活動を進める稲葉真以氏を招き、近代中国の蒐集家廉泉、及び韓国美術のジャンル形成についての企画情報部研究会を開催した。

４．東アジアを中心とする近代美術の交流に関する調査研究として韓国国立中央博物館でのシンポジウム「東洋を蒐集する」に山梨が参加、「李王家コレクションの位置づけをめぐって」の題で発表を行った。

論文

・塩谷純「明治期やまと絵断章」『美術フォーラム21』29　pp.125-131　14.5

・塩谷純「春草と“金銀体”」『菱田春草』展図録　東京国立近代美術館　pp.182-187　14.9

発表

・山梨絵美子「黒田清輝『昔語り』再考」企画情報部研究会　東京文化財研究所　14.9.30

・田中淳「岸田劉生と古屋芳雄―劉生の「駒沢村新町」療養期を中心に」企画情報部研究会　東京文化財研究所　14.9.30

・塩谷純「仙台・昭忠碑、被災から復興へ向けて」第48回オープンレクチャー　東京文化財研究所　14.11.1

・山梨絵美子「李王家コレクションの位置づけをめぐって」シンポジウム「東洋を蒐集する」 韓国国立中央博物館　14.11.14

・河合大介「反芸術・脱主体化・匿名性―山手線事件と赤瀬川原平を中心に―」企画情報部研究会　東京文化財研究所　15.3.24

・橘川英規「観光芸術多摩川展パノラマ図を観る―富士山、機関車、少女、井戸」企画情報部研究会　東

京文化財研究所　15.3.24

刊行物

・塩谷純「開国から1920年代　プロローグとしての日本近代美術史」東京美術倶楽部編『日本の20世紀芸術』平凡社　pp.14-18　14.11

研究組織

○塩谷純、田中淳、山梨絵美子、城野誠治、橘川英規、河合大介（以上、企画情報部）、三上豊、丸川雄三（以上、客員研究員）

美術の表現・技法・材料に関する多角的研究（①企04-14-4/5）

目　　的

本研究は彫刻や絵画といった様々な美術作品を構成する材料やそこに用いられた技法、ひいては表現、その制作過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にどう至ったか、それがどのように受容されてきたか等を、関連書分野と連携しながら多角的に分析し、現在目の前にある「作品」ないし文化財に対するより深い理解を形成することを目的としている。

成　　果

１．作品・関係資料の調査・研究

今年度は以下の各機関・所在地にて各種の文化財を調査または研究を実施した。

ア）東京国立博物館　国宝孔雀明王像

イ）龍谷ミュージアムでの光照寺所蔵一流相承系図（絵系図）ほか調査

ウ）鶴見大学文学部文化財学科との朝鮮螺鈿漆器の共同光学調査

エ）東京国立博物館所蔵国宝普賢菩薩像について高精細画像をもとに東京国立博物館との研究会

オ）鶴見大学・目白漆芸研究所との研究協議と意見交換、新たなデータベース作成に関する所内研究協議

２．彩色関係データベース（語彙・史料編）の公開及び研究所所蔵ガラス乾板のデジタル化

美術工芸品の彩色で重要な、史料上の関係語彙と使用例の総覧を目的に彩色関係資料データベース（語彙・史料編）について、これまで実施してきたデータ校訂・更新を終了し、全データのウェブサイトでの公開を行った。

また昨年度より開始した研究所が所蔵する戦前から戦後にかけての美術作品を写した20,000枚を超えるガラス乾板について、今年度も引き続き透過光撮影法によるデジタル化作業を実施、画像整形と目録文字情報の補訂を行った後、研究所ウェブサイトにて2,759件のデータを新たに公開した。

３．寄贈資料の整理

前中期計画に引き続き今年度も表現技法材料研究と特に関わりの深い秋山光和旧蔵画像についてスキャニング作業を終了し、公開に向けたデジタルデータの整理作業を実施した。

論文

・小林公治「2013年開催の南蛮漆器に関係する展覧会から―Lacas Namban（マドリード）と「伊達政宗の夢」展（仙台）」『美術研究』413号　東京文化財研究所　pp.43-51　14.10

・小林達朗「美麗の術―国宝千手観音像の場合」『文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「かたち」再考―開かれた語りのために―』 東京文化財研究所　pp.143-156　14.12

発表

・小林公治「琉球王国時代の螺鈿漆器製作技術を探る」、「トルコの螺鈿―本格調査に向けた予備的検討―」、「パレスチナの螺鈿―その特徴と歴史に関する予察―」第５回琉球の漆文化と科学　ポスター発表　14.11.15

・小林公治「南蛮漆器書見台編年試論」企画情報部研究会　東京文化財研究所　14.12.9

・小林達朗「東京国立博物館蔵　国宝・普賢菩薩像の表現－附論　仏画における「荘厳」」企情報部研究会　東京文化財研究所　14.12.9

研究組織

○小林公治、田中淳、山梨絵美子、塩谷純、津田徹英、二神葉子、小林達朗、皿井舞、安永拓世（以上、企画情報部）、江村知子（文化遺産国際協力センター）、中野照男（客員研究員）

無形文化財の保存・活用に関する調査研究（①無01-14-4/5）

目　　的

我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。

成　　果

1．特殊再生装置を要する音声資料の内、フィルモン音帯について継続調査を実施し『無形文化遺産研究報告』第９号に掲載した。

2．室町時代の巷間芸人放下の歌謡のうち、現在まで能・狂言で伝承されている「海道下り」と「放下僧」の小歌について考察し、第９回無形文化遺産部公開学術講座などで公表した。世阿弥の作曲技法について考察し、論文、著書などにまとめた。幸流小鼓の名家山崎家伝書について考察し、法政大学での講座で発表した。

3．染織技術のうち、熊谷染（埼玉県）の事例を中心に、原材料や道具の入手・供給の状況を調査した。調査時に作成した映像資料は文化学園服飾博物館「時代と生きる」展（2014（平成26）年12月～2015（平成27）年２月）で公開し、展覧会の会期にあわせて研究会を開催した。染織技術の解明に向けて染織品調査と染織技法書の抽出整理を行い、成果を『無形文化遺産研究報告』第９号に掲載した。

4．第９回公開学術講座を「流行歌としての道行き―『海道下り』を中心とした能・狂言歌謡の源流と広がり」のタイトルで10月18日に東京国立博物館平成館大講堂で行った。

5．連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録16席を作成した。また、昨年度に引き続き、ほとんど上演されなくなっている落語の正本芝居噺（道具入り）について、林家正雀師による実演記録２席を作成した。観世流謡曲について、流儀の重鎮関根祥六氏の謡を録音した。

論文

・高桑いづみ「返シを謡うということ―［上ゲ歌］形成の一過程とその応用―」『能と狂言』12号　pp.114-127　14.8

・高桑いづみ「《放下僧》と《海道下り》放下の歌」『花もよ』15　pp.10-11　14.9

・菊池理予「染色技法書に見られる豆汁の役割－寛文６年刊『紺屋茶染口伝書』を中心として―」『無形文化遺産研究報告』第９号　東京文化財研究所　pp.1-23　15.3

報告

・飯島満「フィルモン一覧」『無形文化遺産研究報告』第９号　pp.175-191　15.3

発表

・高桑いづみ「放下の歌と能・狂言」第９回無形文化遺産部公開学術講座　東京国立博物館平成館大講堂　14.10.18

・高桑いづみ「山崎家旧蔵小鼓伝書の概要」『よみがえる鼓胴－山崎家伝来「錠図蒂梨」の音色を聴く』法政大学市ヶ谷キャンパス　15.2.27

・菊池理予「染織技術の伝承における道具の役割－熊谷染を事例として－」東京文化財研究所平成26年度第２回総合研究会　東京文化財研究所地下１階セミナー室　14.11.4

・菊池理予「日本伝統染織技術の継承と発展」日本民俗服飾特別講義　文化学園大学　15.1.26

・菊池理予　無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究会「染織技術をささえる人と道具」趣旨説明

とパネルディスカッションコーディネーター　文化学園大学　15.2.3

刊行物

・高桑いづみ『能・狂言－謡の変遷－』 288p　檜書店　15.2

研究組織

○飯島満、高桑いづみ、菊池理予、佐野真規（以上、無形文化遺産部）、早川典子（保存修復科学センター）、星野厚子（客員研究員）

無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（①無02-14-4/5）

目　　的

我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集・保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理・公開準備を行う。

成　　果

１．無形民俗文化財に関する調査・資料収集

ア）無形民俗文化財に関する調査・資料収集

民俗芸能の調査として「杉沢比山番楽」「幸田神楽」「厚岸神楽」等について、民俗技術の調査として「菅笠製作技術」「藤箕製作技術」「揚げ浜製塩の技術」「鵜飼漁の技術」等について伝承や保護の実態についての現地調査や資料収集を行い、現状を把握すると共に現地関係者とのネットワークを構築した。

イ）被災地における無形民俗文化財の調査研究

東日本大震災被災地である福島県南相馬市、福島県浪江町、宮城県女川町、岩手県大船渡市等で民俗芸能・祭礼の調査を行い、資料収集・記録保存等を行った。

ウ）無形文化遺産関係ネットワークの構築とデジタルアーカイブ事業

伝統文化活性化国民協会からデジタルコンテンツの移譲を受けたことに加え、無形文化遺産情報ネットワークにおけるデジタルアーカイブの公開準備を進めるなど、デジタルコンテンツのさらなる拡充と整備を行った。

２．無形民俗文化財の公開状況に関する調査研究

全国民俗芸能大会（日本青年館）等における芸能公演に関する調査と記録を行った。

３．研究集会の開催

ア）無形民俗文化財研究協議会

第９回無形民俗文化財研究協議会を2014（平成26）年12月５日、「地域アイデンティティと民俗芸能―移住・移転と無形文化遺産」をテーマに東京文化財研究所において開催し、128名の参加を得た。

イ）無形文化遺産情報ネットワーク協議会

第３回無形文化遺産情報ネットワーク協議会を2015（平成27）年３月27日に東京文化財研究所において開催。無形文化遺産の復興支援におけるさまざまな分野の関係者と今後の支援の在り方について協議した。

論文

・久保田裕道「花祭り研究の現在―山﨑一司『花祭りの起源―死・地獄・再生の大神楽』と井上隆弘『霜月神楽の祝祭学』によせて―」『民俗芸能研究』57　民俗芸能学会　pp.29-42　14.9

報告

・久保田裕道「芸態からみる松山踊り」『高梁市松山踊り保存調査報告書』 高梁市　pp.38-49　15.3

発表

・久保田裕道「まっさきに学ぶ！　ふるさとの記憶をたどる…ごいし民俗誌から」大船渡市末崎公民館　14.5

・久保田裕道「冷泉家七夕行事の民俗性」藝能学会　蕨市立文化ホールくるる　14.7

・今石みぎわ「伝統技術を伝えていくということ―『長良川の鵜飼漁の技術』の保存・活用」長良川うか

いミュージアム　15.1
・今石みぎわ「暮らしの記憶を記録する　ごいし民俗誌その後」大船渡市末崎公民館　15.2
・今石みぎわ「菅笠は福岡町の宝－地域の無形民俗文化財がもつ意味とその活用」富山県高岡市ふくおか総合文化センター　15.3

刊行物

・『第９回無形民俗文化財研究協議会報告書　地域アイデンティティと民俗芸能―移住・移転と無形文化遺産』東京文化財研究所　15.3
・今石みぎわ・北原次郎太『花とイナウ―世界の中のアイヌ文化』北海道大学アイヌ・先住民研究センター　15.3

研究組織

○久保田裕道、今石みぎわ（以上、無形文化遺産部）、齊藤裕嗣（客員研究員）

無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集（①無06-14-4/5）

目　　的

無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。

成　　果

1．韓国との交流事業では、韓国国立無形遺産院から、調査研究記録課の李明珍学芸研究士を2014（平成26）年８月11日～９月９日の間、無形文化遺産部に迎え、研究交流を実施した。日本側からは、2014（平成26）年８月18日～30日の間、菊池理予研究員を派遣し、韓国における無形文化財（工芸技術）の保護制度について調査研究を行った。また、2015（平成27）年３月２日～14日には久保田裕道無形民俗文化財研究室長を派遣し、韓国における民俗芸能・風俗慣習についての調査研究を行った。

2．無形文化遺産分野の国際的情報収集では、以下の国際会議等に出席し、情報収集及び研究発表等を実施した。

2014（平成26）年10月16日「韓・中・日無形遺産国際シンポジウム」韓国　ソウル・重要無形文化財伝授会館

2014（平成26）年11月23日～29日「無形文化遺産保護条約第９回政府間委員会」フランス　パリ・ユネスコ本部

論文

・二神葉子「無形文化遺産の保護に関する第9回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」『無形文化遺産研究報告』第9号　pp.25-39　15.3

発表

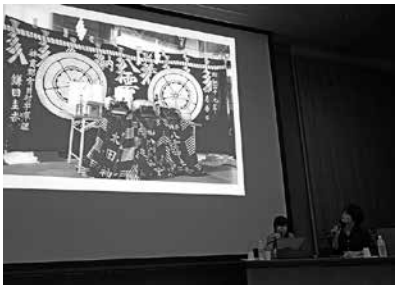
・菊池理予「染織技術に関わる原材料と道具の現状」韓国国立無形遺産院　14.9.4

・久保田裕道「日本における風流芸能の伝承と保存」韓国文化財保護財団　14.10.16

・久保田裕道「日韓の正月儀礼を中心とした比較研究」韓国国立無形遺産院　15.3.13

研究組織

○飯島満、高桑いづみ、久保田裕道、菊池理予、今石みぎわ（以上、無形文化遺産部）、二神葉子（企画情報部）



李明珍学芸研究士による東京文化財研究所での成果報告会（14.9.8）

韓国での調査（15.3.5）

文化財デジタル画像形成に関する調査研究（①企05-13-4/5）

目　　的

脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。そこで文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。本調査研究では、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法、および、その応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究することを目的とする。

成　　果

１．文化財の調査・撮影など

個人所蔵黒田清輝作品（近赤外線撮影、カラー撮影（2014（平成26）年５月１日））

この他所内外からの依頼を受け、各種修復文化財や伝統保存修復技術、飯田市美術博物館にて菱田春草作「菊慈童」、熊本県立美術館にて永青文庫所蔵菱田春草作「落葉」「黒き猫」、東京国立近代美術館にて岸田劉生作「古屋君の肖像」「壺の上に林檎が載って在る」、平等院にて国宝扉絵、などの光学調査を実施した。

２．他機関との共同調査

ア）奈良国立博物館と共同研究に関する研究協議会を開催（2014（平成26）年５月23日）

イ）宮内庁三の丸尚蔵館（「春日権現験記絵巻」第７巻・第14巻の可視光線マルチショット撮影・赤外線撮影（上下両方向）・蛍光撮影による調査（2014（平成26）年５月27～30日））

３．成果の公表

これまでの調査研究成果のうち、奈良国立博物館との共同研究成果である大徳寺伝来五百羅漢図について報告書内に論考として公表したほか、下記のような様々な刊行物にて成果を公表した。

４．研究および開発

昨年度に引き続き、退色して判読不能となったいわゆる青焼コピーに対する撮影による簡便な復元手法の研究および開発を行った。

論文・報告書等

・城野誠治「「大徳寺伝来五百羅漢図」銘文の可視画像化について」『大徳寺伝来五百羅漢図』奈良国立博物館・東京文化財研究所編　pp.260-261　14.5

・『大徳寺伝来五百羅漢図』　奈良国立博物館・東京文化財研究所編　14.5

・「普賢菩薩像」・「虚空蔵菩薩像」『日本国宝展』　東京国立博物館　pp.70-74　14.10

研究組織

○小林公治、田中淳、山梨絵美子、塩谷純、津田徹英、二神葉子、小林達朗、皿井舞、安永拓世、城野誠治（以上、企画情報部）、早川泰弘（保存修復科学センター）、江村知子（文化遺産国際協力センター）

文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究（①保修02-14-4/5）

目　　的

博物館、美術館、図書館などの屋内環境におけるカビの予防、対策のみならず、寺社等の歴史的建造物や古墳環境などの屋外に近い、環境管理が難しい場所での制御方法についても検討を行う。

成　　果

1．古墳環境においてこれまで集積してきた観察室の浮遊菌、付着菌の計測値をもとに、除菌清掃を実施する必要がある浮遊菌数の基準値の試案を設定することができた。
2．カビの発生原因や状況が分析できた現場においては、現地の状況に適合した新たな湿度管理方法について具体的な方策を検討している。
3．歴史的木造建造物の生物劣化要因として、昆虫、もしくはそれらに共生する微生物由来の酵素活性について詳細な検討を行い、その研究成果を学会及び研究紀要などに発表した。
4．処理中のカビの発生を抑制しつつ殺虫処理が行える低酸素濃度処理については、温度が低くなると処理に要する期間が長くなることがわかっていたが、常識的な温度条件（25℃、27.5℃など）で完全に殺虫処理ができる最短期間を実験によって検討した。またその結果を研究紀要に発表した。
5．海外から研究者を招聘し、温湿度が変動する環境におけるカビ発生条件について議論を行った。

論文

・佐藤嘉則、犬塚将英、森井順之、矢島國雄、木川りか「虎塚古墳の公開保存施設における微生物調査」『保存科学』54　pp.121-132　15.3
・小野寺裕子、小峰幸夫、木川りか「低酸素濃度殺虫法―25℃、27.5℃、30℃における処理期間の検討―」『保存科学』54　pp.161-170　15.3
・木川りか、雪真弘、佐藤嘉則、遠藤力也、小峰幸夫、原田正彦、大熊盛也「歴史的木造建造物を加害するオオナガシバンムシ幼虫のセルラーゼ活性について」『保存科学』54　pp.145-160　15.3

発表

・木川りか、雪真弘、佐藤嘉則、遠藤力也、小峰幸夫、原田正彦、大熊盛也「歴史的木造建造物を加害するオオナガシバンムシ幼虫のセルラーゼ活性について」文化財保存修復学会第36回大会　奈良教育大学　15.6.7-8

研究組織

○木川りか、佐藤嘉則、佐野千絵、犬塚将英、吉田直人、早川典子、森井順之、小野寺裕子、岡田健（以上、保存修復科学センター）、藤井義久、小峰幸夫、間渕創（以上、客員研究員）

古墳環境における
浮遊菌、付着菌の調査

対照としての外気の
サンプリング

文化財の保存環境の研究（①保修03-14-4/5）

目　　的

異常な高温・低温など最近の異常気象は文化財を展示収蔵する施設内の環境にも影響を与える。環境データや材料の水分特性などを用いた環境シミュレーションを行い、文化財の保管環境を考慮した博物館の省エネ化に関する研究を行う。内装材料等からの汚染ガス対策の研究を行い、文化財収蔵空間で使用可能な材料を選択する試験法の試案をまとめる。

成　　果

１．1970年代に建てられた美術館の収蔵庫内の温湿度分布と壁面温度の実測と解析

冬季に外壁近くで湿度が高くなりカビ発生が懸念される美術館収蔵庫において、原因究明のために、収蔵庫内の温湿度、壁面温度を測定し、屋外からの影響で壁面温度が低くなったことを確認した。壁面温度低下が湿度上昇を招いていたので、外壁の断熱性を上げることが対処法のひとつであると考えられる。

２．テスト用実大展示ケースを用いたガス濃度実測結果

ガス発生源がケース内にある場合、任意の時間のケース内濃度が予測可能であることがわかった。計測のためにガラス面等に多数の測定孔を持つテスト用展示ケースを設置し、床面に合板を据えてケース内の酢酸濃度を定期的に実測した。この結果、時間の経過に伴い酢酸濃度の上昇幅は小さくなることがわかった。これらの補正を加えて材料試験の結果との整合性を比較し材料試験のシミュレーション精度を高められた。

３．研究成果の公開

「文化財の保存環境の制御と予測」の研究会を開催し、空調設備を用いた温湿度制御事例、展示ケース内の温湿度、空気質の調査事例、コンピュータシミュレーションによる温湿度環境の予測等について検討した（2015（平成27）年２月９日、発表者：６名、外部からの参加者数：29名）。

論文

・Masahide Inuzuka "Modelling temperature and humidity in storage spaces used for cultural property in Japan" Studies in Conservation 59-1 pp.52-54 14.9

・古田嶋智子、呂俊民、林良典、須賀政晴、佐野千絵「テスト用実大展示ケースを用いたケース内ガス濃度の解析」『保存科学』54　pp.205-214　15.3

発表

・Tomoko Kotajima, Toshitami Ro and Chie Sano "Estimation of acetic acid and ammonia gases concentration in museum display cases using emission rate of construction materials" 11th International Conference – Indoor Air Quality in Heritage and Historic Environments, Kaiserstejn Palace, 14.4.13-16

・間渕創、犬塚将英「気流解析と実測によるLED照明を用いた展示ケース内の温湿度分布の調査」文化財保存修復学会第36回大会　明治大学　14.6.7-8

・古田嶋智子、呂俊民、林良典、須賀政晴、佐野千絵「気密性を有する展示ケースのガス濃度推移」室内環境学会　工学院大学　14.12.5-6

研究組織

○佐野千絵、犬塚将英、吉田直人、木川りか、佐藤嘉則、石井恭子（以上、保存修復科学センター）、呂俊民、北原博幸、間渕創、古田嶋智子、石﨑武志（以上、客員研究員）

備　　考　当プロジェクトの一部は、株式会社岡村製作所との共同研究成果である。

文化財の材質及び劣化調査法に関する研究（①保修01-14-4/5）

目　　的

小型可搬型機器によるその場分析、及び非破壊・非接触技術による診断・解析手法の確立と実資料への応用を行う。絵画や彩色文化財に使われている顔料・染料の同定や褪色の評価、あるいは金属製文化財の材質調査や腐食生成物の分析などに関する調査手法の確立を行い、調査結果の蓄積と成果公開を行う。

成　　果

１．小型可搬型機器によるその場分析

ア）ハンディ型蛍光Ｘ線分析装置により、国宝平等院鳳凰堂板扉絵（平等院）、春日権現験記絵巻（宮内庁三の丸尚蔵館）、伊能図（徳島大学）等の彩色材料調査を実施し、データの蓄積・解析を行った。

イ）小型可搬型の可視反射分光分析装置により、江戸期の絵図や日本絵画に使われている有機染料の分析・解析を進めた。

ウ）可搬型のＸ線透過撮影装置とイメージングプレートを用い、仏像や金工品等の内部構造について現地での撮影を行った。

２．分析の高度化

ア）蛍光Ｘ線分析による分析精度の向上を目的に、定量法に関する条件検討を行うとともに、実資料への適用を行い、金銅仏等の金属製品に関する高精度データ解析を行った。

イ）有機質材料の高精度分析を目的に、材料の蛍光特性変化に着目した非破壊分析の可能性を検討した。いくつかの有機質材料について、蛍光寿命や蛍光波長が材料の状態や特性に依存する結果を見出した。

ウ）昨年度導入した高エネルギーＸ線透過撮影用機器の調整と試験を行った。これらの機器を用いて、仏像、漆工芸品、絵画等の構造調査を行った。

３．研究成果の公表

文化財デジタル画像形成に関する調査研究（企05）と共同で実施した重要文化財泰西王侯騎馬図屏風（サントリー美術館、神戸市立博物館所蔵）、及び重要文化財洋人奏楽図屏風（永青文庫所蔵）に関する光学調査報告書を刊行した。

論文

・吉田直人「膠の主成分ゼラチンの蛍光特性変化について―濃度依存性と硫酸アルミニウムカリウムの影響―」『保存科学』54　pp.185-192　15.3

発表

・早川泰弘、城野誠治、神居文彰「平等院の国宝鳳凰・梵鐘・装飾金物の材料調査」日本文化財科学会第31回大会　奈良教育大学　14.7.5-6

・佐々木良子、吉田直人、佐々木健「蛍光寿命測定の文化財材料への応用に関する基礎研究１」日本文化財科学会第31回大会　奈良教育大学　14.7.5-6

刊行物

・『泰西王侯騎馬図屏風　光学調査報告書』東京文化財研究所　15.3

・『洋人奏楽図屏風　光学調査報告書』東京文化財研究所　15.3

研究組織

○早川泰弘、岡田健、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英、佐藤嘉則（以上、保存修復科学センター）、城野誠治（企画情報部）、三浦定俊（客員研究員）

周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究（①保修04-14-4/5）

目　　的

屋外に位置する木造建造物及び石造文化財を対象に、文化財劣化要因となる周辺環境の影響評価手法や劣化診断手法を確立する。また、木造建造物の修復材料について実験室及び現地曝露試験による評価を行う。

成　　果

１．石造文化財の調査研究

ア）砂岩の劣化機構解明と周辺環境影響に関する調査（出島旧石倉）

天草砂岩でみられる表層剥離について、旧石倉及び旧出島神学校基礎床面で調査を行い、剥離片表面が剥離後の本体表面と比べて硬質であること、雨で濡れやすく乾燥しやすい部分で顕著な劣化を確認した。

イ）既修理物件の保存状態に関する追跡調査（幸橋（長崎県平戸市））

幸橋は昭和58年度の保存修理工事において石材の基質強化にシリコン樹脂が使用されている。主に目視による保存状態調査の結果、30年経過した現在でも特に大きな問題は見られなかった。

２．木造建造物の調査研究

ア）材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査（中嶋神社、稲荷神社（石川県加賀市））

ガラス張りの透明な覆屋（稲荷神社）と従来からある木板の雪囲い（中嶋神社）で、覆屋内の温湿度・照度・紫外線強度の調査を継続した。調査の結果、透明覆屋内で紫外線強度が高いことを確認した。

３．大韓民国国立文化財研究所との共同研究

2014（平成26）年５月27日、韓文研保存科学センターセミナー室にて研究会を開催するとともに、日韓相互のサイト（26年度は地下式横穴墓群）で保存展示に関する共同調査を行った。

論文

・朽津信明、森井順之、佐藤円香、西山賢一「鳥取県・花見潟墓地赤碕塔に見られるハニカム状風化」『保存科学』54　pp.1-14　15.3

・森井順之「屋外文化財の保存と公開のための覆屋について」『第44回熱シンポジウム『役に立つ湿気研究』』日本建築学会　pp.91-96　14.10

・朽津信明「日本における横穴墓の保存」『日韓共同研究成果報告会報告書2014』大韓民国国立文化財研究所／東京文化財研究所　pp.2-7　14.5

発表

・朽津信明、伊藤広宣、山路しのぶ、神田高士「臼杵市・下藤キリシタン墓地における遺構の凍結防止策（2）」文化財保存修復学会第36回大会　明治大学　14.6.7

・小泉圭吾、森井順之、神田高士、伊藤広宣「冬場の臼杵石仏における覆屋の有効性評価のためのリアルタイム環境観測システム」日本文化財科学会第31回大会　奈良教育大学　14.7.5-6

・朽津信明、森井順之、佐藤円香、西山賢一「長崎市出島で見られる砂岩石材の風化現象について」日本応用地質学会平成26年度研究発表会　九州大学　14.10.29-30

・森井順之「臼杵磨崖仏における保存環境調査と次期保存修理計画」保存科学研究集会2014「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」 奈良文化財研究所　15.1.23

刊行物

・『2014年度韓日文化財保存環境成果報告書―文化財環境の保存管理技術研究』大韓民国国立文化財研究所／東京文化財研究所　14.5

研究組織

○朽津信明、早川典子、森井順之、岡田健（以上、保存修復科学センター）

文化財の防災計画に関する研究（①保修05-14-4/5）

目　　的

自然災害による文化財被害は甚大であり、復旧には多大な労力と時間を要する。我が国では自然災害の発生予測が難しいうえ、発生後すぐの救援はほぼ不可能である。そのため、「減災」の方向性を探ることが求められている。本研究課題では「地震・津波」を対象に下記の調査研究を進め、文化財の減災に必要な研究成果を提供する。

成　　果

１．東日本大震災被災文化財の保全に関する研究

ア）旧石巻市立湊第二小学校環境調査

東日本大震災で津波被害を受けた石巻文化センター収蔵品の一時保管施設である旧石巻市立湊第二小学校で、温湿度データ回収、文化財害虫調査、空気質調査などを去年に続き石巻市・東北歴史博物館と共同で実施した。石巻文化センターの再建が平成31年度以降と言われているなか、これらの調査を現地担当者と一緒に行うことで、資料保存に関する技術移転も進めることができた。

２．文化財の地震対策に関する研究

ア）実物大石灯籠の振動台実験

昨年度実施した縮小模型による実験ではスケール効果により不明な点が多かったため、つくば市にある独立行政法人防災科学技術研究所の一次元大型振動台を用いて実物大石灯籠の振動実験を実施した。石灯籠は、空積に加えモルタル接合・芯棒・免震ゲルと３種類の地震対策を施したサンプルを用意し、新潟県中越地震の波形を使って揺らしたところ、本来の50％の振幅（震度６弱相当）で全て倒壊した。画像解析や加速度計データにより倒壊プロセスが確認でき、今後の地震対策について有用なデータを得た。

イ）地震災害の現場調査

2014（平成26）年11月22日に長野県北部で発生した震度６の地震により倒壊被害があった長野市善光寺境内の石灯籠・石碑の被害状況を調査し、被害発生の機構と安全対策についての検討を行った。

ウ）平成25年度研究成果の公表

昨年度三重大学で実施した石灯籠縮小模型の振動台実験結果をまとめ、「石造文化財および地盤遺産の保存に関する国際シンポジウム（2014（平成26）年５月20日～23日、韓国・公州大学）」で発表を行い、論文が掲載された。

論文

・Masayuki Morii, Nobuaki Kuchitsu, Madoka Sato, Yumiko Okamoto and Toshikazu Hanazato "Fundamental research about vibration of stone lantern（ishi-toro）by earthquake" Proceedings of the international conference on conservation of stone and earthen architectural heritage, pp.98-108, 14.5

発表

・森井順之、及川規、芳賀文絵「石巻市仮収蔵施設の保存環境」平成26年度宮城県被災文化財等保全連絡会議研修会　東北歴史博物館　14.11.20

研究組織

○朽津信明、森井順之、岡田健（以上、保存修復科学センター）

文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究（①保修06-14-4/5）

目　　的

我が国ではこれまで和紙、糊、膠、漆、顔料などの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。これら文化財に使用される伝統技術及び材料や保存修理で使用する合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査・分析・評価及び開発を行い、修理現場での応用を図る。以上の内容に即した研究会を開催する。

成　　果

1．文化財建造物に使用する塗装材料の耐候性向上に向けた手板暴露試験を進めるとともに、Py-GC/MS分析装置を用いた塗装材料の性質の調査を行った。この調査実績を日光東照宮陽明門や厳島神社反橋などの塗装彩色修理の施工に役立てた。

2．研究所が所蔵する表具裂見本の絹布関係資料について、個々の資料の絹の折状態や繊維の拡大顕微鏡画像の取り込みを行い、基礎データを集積した。

3．桃山期の当世具足には漆では獲得できない肌色や緑色が表面塗装されている場合がある。鍋島家所蔵具足の塗料分析したところ、石黄＋植物藍を混和した乾性油系塗料であることがわかり、この甲冑の修理や復元に役立てた。

4．研究会の開催

「日光東照宮陽明門西壁面唐油蒔絵の調査と修理」という内容で、2014（平成26）年12月18日に東京文化財研究所の地下セミナー室で第８回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会を開催し、計132名の参加を得た。

5．第６～８回の文化財における伝統技術及び材料に関する研究会の報告内容を、文化財建造物の塗装彩色修理の施工に役立てる目的で、コンパクトにまとめたブックレット形式の報告書を作成した。

論文

・北野信彦、本多貴之、佐藤則武、浅尾和年「日光東照宮唐門および透塀の塗装彩色材料に関する調査」『保存科学』54　pp.37-58　15.3

発表

・北野信彦、犬塚将英、吉田直人、桐原瑛奈、本多貴之、浅尾和年、佐藤則武「日光東照宮陽明門側面大羽目絵画の彩色に関する調査」文化財保存修復学会第36回大会　明治大学　14.6.8

刊行物

・『文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究報告書2014年度』東京文化財研究所　15.3

・『文化財建造物における塗装彩色材料の調査・修理・活用』東京文化財研究所　15.3

研究組織

○北野信彦、朽津信明、早川典子、吉田直人、犬塚将英、佐藤嘉則（以上、保存修復科学センター）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター）、本多貴之（客員研究員）

文化財修復材料の適用に関する調査研究（①保修12-14-2/3）

目　　的

文化財修復においては、使用する材料及び手法の適切な適用が修復後の作品の状態を大きく左右する。本プロジェクトでは、文化財の種類を問わず修復に用いられる材料について、修復現場での具体的な使用を念頭に材料の分析及び評価を行い、個々の材料について分野にとらわれず横断的な研究を行うことで、最適な使用方法や使用条件の確立を目指す。

成　　果

１．絵画修復材料に関する科学分析及びクリーニング方法の検討実験

ア）絵画の修復材料に使用される膠について、その最適な適用条件を検討した。調製条件の異なる膠は、物性に差異があり、適切な膠を選択することで、絵画や建造物彩色の剝落止めを安全に行うことが可能になる。本年度は、擬似劣化試料を作製し、そこへの各種膠の適用を検討した。

イ）日本画の修復に用いられる古糊の使用時に限定的に行われる「増裏打ち」という作業の熟練度と古糊使用との関連について、接着強度と技術者の熟練を中心に解析した。

ウ）日本画で見られる緑青焼けについて、裏打ち紙の分析を行うことで劣化状態を確認し報告を行った。

エ）文化財修復に用いられるフノリについて調製条件による物性の差異を科学的に評価し、IIC香港大会において発表を行った。

２．建造物等修理材料の現地暴露試験とその評価

ア）厳島神社において、大鳥居修理材料について現地曝露試験を行い、耐久性に関する評価を目視観察及び測色により行ってきたが、その結果、良好な経過を示した試料について実際の試験施工を行った。

イ）臼杵磨崖仏で現地に設置している石材の修理材料について、経過観察及び評価を行った。

３．工芸品の評価方法についての検討

ア）染織文化財について、国内の生糸の調査及び韓国での摺箔技法とそこに使用されている材料について現地調査を行った。また、染織品に使用されている材料について分光分析による評価方法を検討した。

イ）漆芸文化財について、塗膜の物理強度の測定方法を検討した。塗膜の強度は従来塗膜全体を剥離して測定する方法のみ使用されていたが、漆は紫外線により表面のみ劣化していく。そのため、表面のみの強度測定方法についてMSE試験の適用を検討した。次年度以降、実用的な使用方法へと発展させる予定である。沖縄で使用されている漆芸品の材料調査を行ったほか、国内の採漆現場や精漆工場の現地調査を行った。

論文

・岡泰央、早川典子、高井由佳、後藤彰彦「増裏打ち作業における古糊と打刷毛の接着効果について」『保存科学』54　pp.15-26　15.3

発表

・Noriko Hayakawa, Keiko Kida, Takuya Ohmura, Noriko Yamamoto, Kyoko Kusunoki and Wataru Kawanobe "Characterization of Funori as a conservation material: Influence of seaweed species and extraction temperature" IIC-HongKong, Hongkong city hall, 14.9.24

・早川典子「典籍類に使用された「豆糊」に関する赤外分光分析」文化財保存修復学会第36回大会　明治大学　14.6.8

・大河原典子、綿引はるな、早川典子「日本画の修復および制作に用いる膠の基礎的特性に関する報告」文化財保存修復学会第36回大会　明治大学　14.6.8

研究組織

○朽津信明、早川典子、森井順之、北野信彦、中山俊介、木川りか、佐藤嘉則、岡田健（以上、保存修復科学センター）、加藤雅人、楠京子、山田祐子、山下好彦（以上、文化遺産国際協力センター）、本多貴之、宇高健太郎、酒井清文、大河原典子（以上、客員研究員）

近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（①保修07-14-4/5）

目　　的

近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物等従来の文化財とは、規模、材質、製造方法等に大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両等の保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。

成　　果

１．洋紙の保存と修復

ア）明治維新以降急速に普及した洋紙の保存に関して、また、建築物や列車（御料車など）の室内装飾に使用された裂地などの保存と修復に関して、国内の専門家と共に調査研究を行った。さらに、専門家を招き、研究会を2014（平成26）年11月21日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。

イ）メキシコ及びカナダの国立公文書館において、洋紙の保存と修復に関する現状調査及び関係者と情報交換を実施した。

２．屋外展示物

ア）ドイツの産業遺産を往訪し、保存理念や、周囲との関係を考慮した保存・修復手法の調査を実施した。

イ）屋外展示されている鉄道車両や航空機など金属を主体とする文化財の防錆対策のために試験片を作成し、日本国内の６ヵ所において曝露実験を実施した。

３．建造物・構造物

新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市韮山反射炉、山口県萩市の反射炉や長崎県長崎市端島（軍艦島）、さらには足尾銅山跡の各施設等、史跡指定地内の建造物や構造物の保存と修復に関する現地調査を実施し、現状を把握するとともに、具体的な修復手法に関する討論を実施した。

４．報告書：前年度実施した研究会『近代テキスタイルの保存と修復』をまとめ報告書を製作し配布した。

５．その他

航空機関連の設計図面あるいは明治後期から大正期、昭和初期にかけて記録された関連資料などのデジタル化を行うなど、貴重な資料を後世に遺すべく現地での状態調査および保存手法の研究を実施した。

論文

・森井順之、朽津信明、中山俊介「史跡・韮山反射炉の保存環境について」『土木史跡の地盤工学的分析・評価に関するシンポジウム』地盤工学会　pp.167-168　14.10

・中山俊介「近代テキスタイルの保存と修復」『近代テキスタイルの保存と修復』 pp.4-17　15.3

発表

・中山俊介「洋紙の保存と修復」洋紙の保存と修復に関する研究会　東京文化財研究所　14.11.21

・中山俊介「保存科学による文化遺産の修復－建造物を中心に－」台湾総督府鉄道部の保存修復活動における講演会　国立台湾博物館　14.12.20

・中山俊介（基調講演）「近代文化遺産の保存と動態保存に関して」第33回シンポジウム「日本の技術史を見る眼」中部産業遺産研究会　15.2.22

・森井順之、朽津信明、中山俊介「史跡・韮山反射炉の保存環境について」土木史跡の地盤工学的分析・評価に関するシンポジウム　地盤工学会　14.10.10

刊行物

・『近代テキスタイルの保存と修復』東京文化財研究所　15.3

研究組織

○中山俊介、朽津信明、早川典子、森井順之、小林芳妃（以上、保存修復科学センター）、小堀信幸、横山晋太郎、長島宏行、堤一郎（以上、客員研究員）